17世紀イングランド常備軍論争（翻訳）

藤原 浩一

SOME

REFLECTIONS

On a Pamphlet lately Publiſh'd,

Entituled, A N

ARGUMENT

Shewing that

A Standing Army

Is inconſiſtent with

A Free Government,

AND

Abſolutely Deſtructive to the Conſtitution of the *Engliſh*-MONARCHY.

Hard words, Jealouſies and Fears,
Sets Folks together by the Ears.
Hudibras Lib. 1.

LONDON:

Printed for *E. Whitlock* near *Stationers-Hall.* 1697.

最近出版された『常備軍は自由政府とは調和せず、イングランドの王制にとって決定的に有害であることを示す主張』と題するパンフレットに関する考察

序文

ABCDEFG氏へ[1]

私は匿名のあなた宛てに書かなければならないので、もしあなたの身分を思い違いなどして、あなたの栄誉ある、著名である名前や称号に対して当然払うべき丁寧さが不適切であればお許しいただきたく存じます。しかし印刷されているのは、パンフレット作者、三文文士、雑多な意見の扇動的な提唱者、などの中傷的な名前にふさわしい題目である。本の内容がそうであれば、その著者もそうであろう。

確かに、あなたはかなり理解し難い人物です。というのはあなたの言葉の調子はしばしば変更されるし、あなたの吹くトランペットは不確かな音を出すので、誰も戦いにたいする心構えができません。あるときは共和主義者のような語り口で、また、あるときは現在の我が政体を賞賛される。さらにあるときは国王を非常に賛美したり、そうかと言えば、いずれかの国王の名を隠れみのにしてたっぷりと国王をからかったりしている。軍隊を浮浪者よばわりするかと思えば、あるときは品行方正で勇敢だという。我が国の市民軍についてはあるときは勇敢であり、十分我が国を守れると言い、またあるときは取るに足らず、少数の軍隊でも我が国を攻め滅ぼすことができるなどと言われるので、現在の人々は誰もあなたの意図が理解できません。

絶叫的な言い回しをする人々の情熱的な長い発言に対してはおそらくふさわしい返答にはなっていないかもしれません。というのは、正直言って、私には悪態をつく才能はないからです。歴史を調べる時間がもっとあればこの話をより生き生きとした実例を示して描写できたでしょう。しかし、実のところ、私がこれを書くときに書物は参考にできなかったので私の引用した年月日が間違っていたらお許し願います。

私が軍人であれば、あなたのパンフレットの最後にある軍隊に対する賛辞に心から感謝するでしょう。国王についてのあなたの語り口はすばらしいものです。また、あなたの話の国王は現国王ではありませんし、軍隊も、現在の軍隊について語っておられるのではありません。まったく違うのです。しかしそれでいて、軍隊とか武器を委ねてならない相手というのは現国王だと言われるのです。また、解散すべきなのは現在の軍隊であると言われるのです。そして国王陛下は自らを兵士として扱ってくれたあなたに極めて感謝しておられます。というのはあなたが軍隊を解散させると同様に彼を退位させることに賛成だと

いうことは明白だからです。

しかし、私があなたを最も賞賛するのは、軍隊を解散しないことがジェイムズ二世[2]を招き入れる方法であり、軍隊を解散することがジェイムズ二世の復権を阻む最も効果的な方法だというあなたの議論のみごとな言い回しです。オオカミの襲来に備えて雇った犬を解雇させるようにと羊がどのように説得されたかという寓話を、きっとあなたは読まれたはずです。この寓話に当てはまるのは明白です。そしてこの箇所の存在こそが、あなたがジャコバイト[3]ではないかと疑われる原因なのです。

あなたは十分激しく主張し、エヒウ[4]のように世間の人々に向かって神に対する熱意に目を向けるように呼びかけられました。しかしあなたは彼と同様に、祭壇ではなく、軍隊を破壊されました。しかしジャコバイト派に対する防備も整えず、国王を暗殺者の極悪な行為にさらしたままです。それはあなたが彼の衛兵と同様に彼をそのままにしておくことに賛成ではないからです。さらにあなたは国家を敵の侵略にさらしたままにしようとしています。そして国王と国民は自分たちで可能な限り自衛しなければなりません。これこそが実際に我々に鉄のムチで従属を教え込む方法であり、残忍な敵の斧のもとで絶えず脅えながら生活させる方法です。

あなたがひたすら唱えておられる言葉は「自由」です。それは魅惑的な言葉です。そして自由や宗教は世界中のほとんどすべての有名な動乱の仮面として使われました。しかしもし自由がイングランド人の権利であるなら、国王や議会にこの件について自分たちで自由に議論させるべきだったでしょうし、論争を引き起こすためにあなたが出しゃばる必要はおそらくなかったでしょう。

軍隊を全面的に解散する以外に方法はないのでしょうか。外敵や、国内の抑圧などから我々を守る手段は他に見い出せないのでしょうか。議会がどのように対処するかどうしてあなたにわかるでしょう。

議会は万能ではないにしても強大ですし、実際、イングランド国民は二万人の軍隊で奴隷化されるような国民ではありません。これまでにそのような行動を試みた者は皆、自ら破滅してしまいましたし、これからもそうであることを望みます。しかし邪悪な人々は脅威もないときに恐れ、追及者もいないのに逃げ回るのです。[5]

人物によりその振る舞いを判断できるようにあなたの身分を明らかにしてくださることを望みます。振る舞いだけでは人物を十分に判断できないのは確かですから。

敬具

D.T. [6]

最近出された「常備軍反対」と題する中傷的内容のパンフレットに関する意見[7]

自分自身の考えにうぬぼれ、また自分の意見をあまりにも誇りに思い、抑えることもできず、特定の分野の人に属する重大な仕事をその人たちに任せることができず、求められもしないのに厚かましくもその問題についていろいろお節介をやかずにはおれない人がいる。知恵だけで作法も知らないことを見せつけるだけなのに。

ちなみに私は「常備軍に反対する主張」と題する中傷的なパンフレットの匿名の著者の挑戦に応じる前に述べておきたい。

もしこのパンフレットの著者が世間で考えられているように、まことに正直な精神をもつイングランド人ならば、そして、この国の安全と、自由と名誉に対する熱意からだけで、この誤った手段をこうじたとするならば、彼はより尊重されるべき人物である。しかし、もしそうだとしても、なぜ彼は自分の名前を隠されるのか。有り難いことに、事実を語ることが反逆であった時代は過ぎ去った。今は誰の発言にも耳を傾けてもらえる時代である。この治世において大胆に語ったことが正しく、真実であった場合、どのような災難を被ることがあったであろうか。いや、善行とともに成立しているその方法においてどのように自由が求められたか。国王自身は制限もされず、非難もされなかった。国王自身宛てに書かれたスチーブン氏[8]の無礼な本を見なさい。しかし著者が世間から身を隠しているので、反抗的な不満分子ではないとどのように考えられるだろうか。馬鹿げた用語を使い、自分のすばらしさにふさわしい報酬を得ていないと不満を抱いている人物であり、ファーグ某[9]、もしくはマン某のような人物であろう。もしくはまぎれもないジャコバイトであり、フランス戦争がうまくいかないので内乱を起こせば恐怖や嫉妬を惹起できるかもしれないと思っているのであろう。これらのどちらであるかは断言できないが、後者であると思われる。なぜなら彼のほのめかしはジャコバイトの常套句であり、彼の国王に対する無礼な難詰の言葉はジャコバイトの党派の常套句そのままであり、まさに悪意に満ちた文体そのものである。

この件に関してはすぐに反論されるかもしれない。(実のところ)「私のことはどうなりとお考えください。それがあなたにとって何になるのですか。私の主張に答えなさい。もしその原則が正しいというならば、悪魔を牧師にすればよい。要点について述べなさい」というふうに。

この件に関しては適切なときにお返事しよう。まず手始めに、文体と考えについての些細な事柄をのぞいてこの著者の言うことすべて、もしくは少なくとも前口上の大部分には

同感である。我々はこの些細な事柄については彼を支持できない。そしてこのようにして大した問題点もなく四ページに進む。というのは実際、これら三ページでは重要な考えは述べられてもいないし、その内容は後に出てくることに何の関連もない。

四ページの第五段落において、実際全体の主題であるが、この短い部分に論点が示されている。すなわち、「イングランドの軍隊は王国の安全と矛盾する。自由と軍隊は両立しない。国王に対しては、国民も、武器も、資金も託してはならない。なぜなら資金は前者の結果となり、我々国民のために生命を賭し、極めて危険な目にあった人間が我々自身を食い尽くしたり、破滅させたりすることのないように」。この著者はこの件に関して国王にもの惜しみなく数多くの言葉を投げかけている。すなわち、国王を暗黙のうちに必然的な結果として、「オオカミ、野獣、暴君などのような言葉」で表している。

この著者は三ページで、「我が国の近隣諸国はすべて必要性に駆られ、又は無分別により常備軍の維持を認めた結果、自由を失った」という。もしそれが必要性からなら、彼らの過ちではなく、不運であった。もしそれが無分別によるものなら、実際彼ら自身の過ちである。

しかし、この著者は必要に迫られた国民の例を一つも挙げてはいない。たとえ彼が例を挙げていたとしても問題ともならず、我々が同様な必要に迫られたなら、我々はその危険を冒さなくてはならない。その件に関してはおいおい語ることにしよう。

同じページで彼は「国王、貴族、そして庶民の正しい均衡に頼っている」我が政体を描写している。そしてその理由により、「この政体は軍隊を解散しなければ、軍隊がこの政体を崩壊させてしまう」という。それを彼独自の確信を持って、「自国のジェントリと自由土地保有者で構成された市民軍以外のいかなる軍隊でも、常備軍を維持している国家はその自由を維持できない」と断言している。続いて本筋に入ると、「過去に起こったことは繰り返され、同じ原因がいつの時代にも同様な結果をもたらす」という。また、実際、原因が同じでも様々な異なる結果をもたらすことがしばしばあることも、すべて同様に真実である。そして過去に起こったことは世界がある限り決して二度と起こらないかもしれない。この件に関してはジェイムズ二世がよい例である。詳細について検討してみよう。

私は以下の注目に値する例だけ挙げておこう。ヘンリー八世[10]はこの王国の（当時確立していた）宗教を国王ジェイムズと同様に破壊しようと力強く、かつ並はずれた努力を払った。おそらく彼の方法は尋常なものではなかったろう。当時の政体は現在と同じであったが彼はこの国を、チャールズ二世[11]やジェイムズ二世が試みたのと同様に専制君主として治めた。しかし結果は退位することもなく外国勢力の援助を求めることもなかっ

た。私はこの国家の他の国王についても述べてみよう。彼らの物語によりこの事実が明らかになるであろう。しかしこの著者は十分立派な歴史家であるのでその事実はご存知のことと思う。さらに付け加えれば、ヘンリー八世が常備軍も持たずに専制政治を行ったことは注目すべき点である。このことから、ここで私が使うすべての例と同様に、国王は専制政治を行おうと決意さえすれば常備軍なしでも実行可能である例としてあげておこう。また逆に、軍隊でそれを防ぐ方法もあるだろう。このことは次の証明となると思う。すなわち、「同じ原因がいつも同じ結果を招くとは限らない」ということである。さらに言えば、「もし同じ原因がいつの時代でも同様な結果をもたらす」と言われるなら、あなたはしばらく恐怖心を捨て去られてみたらどうだろうか。というのはもしウィリアム三世[12]（彼はそんな事はされないと我々は確信しているが）とか、他の国王が我が政体を破壊し、ジェイムズ二世のように我々の自由を踏みにじれば、国民は外国勢力の援助を求め、当時そうしたように国王を追放するであろう。なぜなら、あなたは「過去に起こったことは再び起こるであろうし、同じ原因がいつの時代でも同様な結果をもたらすであろう」と述べておられるのだから。

六ページにおいてこの著者はきわめて正直に現国王のもとでいかに我々が安全であるかを認め、国王の性格を誉め称え、読者の気持ちを和らげ、著者自身の正直さを信じ込ませようとしている。それは彼がいかにうまく表現方法を必要な目的に適合させることができるかを示す例であり、十七ページとよく比較できるであろう。手短に言うならば、現国王が薨去されたなら、次の国王にどなたが即位されるかわからないと結論づけている。いや、軍隊が好都合な国王を擁立し、議会を解散させる事態となるだろう。それゆえに、要するに、現国王の継承者となる最悪の暴君に何物も委ねないですむように、現国王に何も委ねるべきではないという。我が国の現状はきわめて重大で、国王個人の人格は考慮する必要はない。「国王が天使であれ、悪魔であれ、どちらにしても国王は恐怖のもとであり、信頼のおけないものである」。実際にすばらしい話であり、我々の偉大な救済者は（この著者が現国王をそう呼んでいる）これを残念に思われることはなく、甘んじて受け入れられるであろう。「国王は今や、世界中から自分以外の敵を追い払ったので、彼は国家を打ち砕いてしまう大渦巻のようなものと見なされるべきであり、オオカミに牙を持たせてはならないのと同様に、国王の軍隊を完全に解散させなければならない」、というのが著者自身の言葉である。

続けてこの著者は言う、「イスラエル人、アテネ人、コリント人[13]、アカイア人、ラケダイモン人[14]、テーベ人[15]、サムニウム人[16]、ローマ人などのように自由政府を確立した立法

者はすべて軍隊を遠ざけていた」。現在では周知の事実であるが、これら諸国はすべて当初は君主国ではなく共和国として設立された。もしこの著者が我が国をそのような状況に戻したいと言うのなら彼に関してこれ以上話すことはない。ただ私は彼に訴えたい。もしこれらの政府が皆王国になったとき、多かれ少なかれ軍隊を維持したのではないか。いや、イスラエル人が王を欲したとき、神自らがこのような結果になると彼らに伝えたはずである。絶対的必要性として推定されるように、軍事力は王権とともに使用されなければならない。そして「王がいなければ、軍隊も必要なく、軍隊が無ければ、王も不要」ということになる。臣民に関して、国王を玉座に保つために軍隊が必要だというのではない。世界中で、現在の国王ほど国民の国王であったことはないからである。しかし現在の世界で軍隊を持たない国王と国家はどのようなものになるか少しずつ吟味してみよう。

しかし我々の敵対者はここではなく、七ページで続きを述べている。真実、彼は「国王に軍隊を委ねることはないだろう。いや、軍隊ばかりでなく、すべての武器弾薬も国王から取り上げずにはおかない」。そして状況については以前に述べているが、「武力と権力は手を携えて進むことがわかっている。それゆえに全国民が武器をとってこそ自分たちの自由の防波堤となり、(ここでは単語の意味は転換され)、武器弾薬などは国民以外のものに渡してはならない」ということである。なぜなら以下の言葉は直接そのような意味を帯びている。「最も優秀で勇敢な将軍は農民出身であり、戦争が終わった後は満足して再び農民に戻った」という[17]。我が国がもし実際にそうであったならフランスと立派に戦えたはずであろう。彼はさらに続けて、これらの原則から逸脱して自由を失ってしまった国家の例をあげている。その最後の例としてこの著者は世界に向かって、自分の主張したいことを手短に述べている。それは、彼はそこで全知全能の神のごとく世界を分け、羊を右手に、山羊を左手においた。そして世界の君主国すべてを列挙し、(彼の言葉によると)「呪われしものよ、みな地獄のごとく悲惨な奴隷に身を落とせ」と。他方、世界のすべての共和国については、「神の祝福を受けたものよ、国王の常備軍などから逃れて自由の身となれ」という。

いやそれどころか、この著者は自由を享受している国民としてアルジェやチュニスを持ち出して、彼らは自由だという。彼はそれらの国々を訪れたことはないと思われるし、実際、彼がここで述べている自由とはイスラエルに王のいなかった時代、すなわち、すべての人々がそれぞれ自分たち自身の目で正しいと判断して行動していた時代のことであろう。

これまで私は十三ページまでこの著者の一般的な発言にしぼって跡をたどってきた。彼

はさらに続けて、我々に軍隊の危険性について述べ、統治者に対抗して武器を取らざるをえない国々の不運について説く。そのようなことを断言する場合には博識ある歴史家であらねばならない。彼がそうであるか否かを吟味する時間は私にはない。さてここから彼は次のような主張を導き出している。「それゆえに、そのような事態に陥らないように、我々の国王を正す能力が必要である。というのは、我々にそれが可能であれば、そのような羽目には陥らないだろう」という。イングランド人は以下の通りである。国民を恐れる程度に国王を弱いままにしておきなさい。そうすれば国王は決して国民を挑発して、国民が国王に危害を与えるような事態は引き起こさないだろう。というのは、彼の言葉によると、「もっとも戦争能力のある国家ほど平和に暮らせるだろう。しかし、もし国王が二万人の軍隊を我々に対して持っていたらどうだろう」、と彼は言う。ちょうど彼のそのままの言葉で、彼の意図を次のように解釈する。「国民は外国勢力の援助なしでは何の行動もできない」と。

軍隊のもたらすもうひとつの重大な結果として、「軍隊は自分たちに都合のよい人物を国会議員に選出するように国民に強制したり、国会議事堂を包囲したりする」。さて、これらどちらもイングランドにおいて起こったことであり、それでも国民は自由を守ったのである。それは彼の古い格言、「過去に起こったことは再び繰り返されるであろう」とか、「同様な原因は同様な結果をもたらす」という言葉の力を超える実例である。国会議員の選出は妨害され、国会議事堂は包囲され、兵士に襲撃された。それでも国民は自由を奪われなかった。したがって、事態はまた同様な結末になるだろう。すなわち、「過去に起こったことは再び繰り返されるだろう」。

十四ページでは、この著者は個別の事象について語っている。それを裏返せば逆に、二万人よりもずっと強大な軍隊に対して、気迫あふれる反対勢力がどのように立ち向かえるかという生々しい実例である。もしもチャールズ一世[18]が五千人の軍隊を保持していたら、国民は自分たちの自由を守るために国王に一撃を加えることはできなかったであろう、と彼は言う。

この話を逆さにし、議会がどのような軍隊を維持していたか、また国王が何を保持していたかを思い起こしてみよう。それでいて国王は玉座を守るためにいかに多くの手段を講じたであろうか。

議会は海軍、並びにすべての要塞、弾薬庫、軍人を指揮下においていた。一方、国王は、ノッティンガムで国王旗を翻して兵を起こしたとき[19]、軍艦も、軍隊も、武器弾薬も、さらには軍資金も持ち合わせていなかった。それでもイングランド国民と戦うために出陣

したように思えた。一方、全市民軍は軍事査閲官の指揮下にあり、議会の手中にあった。それでも国王は議会側が戦闘準備を整えるより早く、キネトン・フィールド[20]で戦闘態勢を整え、軍隊の先頭に立ち、その会戦を国王側の記録では勝利と記したのである。

それからこの著者はジェイムズ二世に話を進め、「もし彼がイングランドのカトリック化を試みず、恣意的な権力だけで満足していれば、国民の手足を束縛できただろう。その後ジェイムズ二世は国全体と自分自身の指揮下の軍隊を自分に反抗させる結果となってしまった。それでも我々はこの革命を奇跡に近いものだという」。この発言に関して私は反論する。いや、その点では全く奇跡などではないということをイングランドの貴族も、ジェントリも、庶民も誰も疑わない。ジェイムズ二世を理性に従わせたのである。そうでなければ彼らは現在の国王を招き入れなかったであろう。というのは彼らが現国王に奇跡を起こしてもらうことを期待していたわけではない。自由な議会を獲得してもらいたかっただけである。それは十分に国王の宣言に表明されている。しかしこの中にこそ革命の奇跡がある。

神の摂理によるフィリップスブルクの包囲戦[21]よりフランス国王軍の撤退は、あらゆる政策に反するものではあるが、オランダ軍の前線に陽動作戦を仕掛けていたら、彼らは軍隊や州総督を生きながらえさせることはなかっただろう。

すばらしい天の配剤による風と天候によりジェイムズ二世の艦隊を閉じこめたので奇襲を容易かつ安全にした。

そしてついにジェイムズ二世の逃亡につながり、内乱を起こさずに王国全体を再び平静に戻すことができた。これは世界の予想に反することであり、奇跡に近い事柄である。

ここで我々は彼の引用を吟味してみよう。それによって彼の他の例を想像させてもらうこととしよう。それは実際、総じて極めて昔の話から選ばれている。彼の言葉によれば、極めて少数の軍隊でも革命を起こせるという。オリヴァー・クロムウェル[22]は一万七千人の軍隊を残したというが、嘘つきは記憶力が良くなければならない[23]。彼は三万五千人以下の兵士で議会に認めさせた革命を実行したのではない。もし彼が一万七千人を残したのなら、(その数でも私は認めないが)、そのときモンク将軍[24]指揮下の少なくとも一万二千人の軍隊がスコットランドに残されていたと思われる。アイルランドには昔の軍隊から引き抜かれて一万人以上が残っていたであろう。そのほかにも主義主張を変え、降伏したものもいる。プレトリアン[25]の兵士についてはローマ帝国内で自ら革命を起こしたという話は聞いたことがない。ジュリアス・シーザーは彼がガリア[26]からローマへ進軍したときはずっと大勢の軍隊を伴っていた。そしてドミティアヌス[27]や、ティトゥス[28]とかティベリウス[29]

の皇帝に宣戦布告したときはずっと大きな軍隊であった。それからオットーマン帝国については、この著者はほとんど無知であると思われる。イエニチェリ[30]はこの帝国で、この戦争まで七万人を下ったことはない。彼の言うイエニチェリの宮廷とは何のことかわからないが、セリム[31]が父のアムラス[32]を殺したとき、その戦いには五万人以上のイエニチェリとスパヒス[33]がいた。しかしもし一万七千人の軍隊でこの国を隷属させることができるなら、この著者が愚かにも仮定するように、我々の市民軍も同様な能力があるであろう。

彼の十五ページのパラグラフに関して、彼はこの軍隊は臨時のものであり、我が政体の一部ではないという。そんな話は聞いたことがないと彼に言っておかなければならないが、賛成なので黙って認めたい。国王と議会が我が国の存立のために必要だと認めるだけの数の軍隊を、また必要と認める限りの期間、維持すべきである。そしてこの軍隊のせいで我々の自由が危険にさらされることはないであろう。現在の我々の国王と議会とのあいだには満足のいく連合が形成されている。国王は国民の自由を侵害しようとはせず、国民も国王の特権を侵そうとしない。国王は国民の安全のために軍隊を要望しているのであり、国民は必要な軍隊は拒絶しない。しかしここで著者は、このパンフレットの最初で、王国の安全は適切な均衡にかかっていると言い、また同時に、我々の軍隊、もしくは弾薬は国王に委ねてはならないと我々に告げている。これで適切な均衡と言えるのだろうか。

さらにこの著者は続けて、国民が財布のひもを握っているのだと言うが、この発言は全く議論の価値がない。軍資金により軍隊を徴募するのと同様に、軍隊が資金を徴収する。彼は実際、「それはあまりにも絶望的な手段である」と言いたいようだ。彼らしい発言である。ただ彼に尋ねておきたいが、二万の軍隊でこの王国全体を制圧し、武力を背景として民家に無料で軍隊を駐屯させ、生活させることができると考えているのか。イングランドにおいて船舶税が実施されたときの国民の警戒心のことを考えてもらいたい。当時チャールズ一世は軍隊を持ち、議会は閉会中であった。このとき国王は国庫の閉鎖を提案している。彼は実際、少しでも可能性のあるものはすべて仮定してみようと考えているようである。もしも国庫が閉鎖されたらどうなるだろうか。この資金は国庫に規定通りにあるわけではなく、軍隊の援助を得て徴収しなければならない。だからその経費は収入と同額になる。騎兵によって資金を徴収したイングランドにおいては、考案者の破滅に終わった。そして著者は、「過去に起こったことは常に繰り返す」という。

この点から著者は国王陛下の人格に関して横柄で無礼なひやかしを続ける。「我々は国王の美徳を誘惑に導いて危険を冒すべきではない」と述べる。彼に言わせれば、「我々の英雄は雑多な混血」であり、大抵の人はあらゆる害悪をなすので、子供や精神障害者を扱

うように対処することを支持している。そして、自分たち自身や他人に危害を及ぼす恐れがあるので、彼らからすべての武器を取り上げる。将来、オオカミに牙を持たせないでくれとアポロに懇願した羊のように。

彼が「廷臣たち」と、複数形で示したことは、人の目を欺くには薄すぎる覆いでしかなく、あたかも多くの言葉で語られたのと同じぐらいに明白である。すなわちこれは国王に対して直接に投げかけられた言葉である。なぜなら、我々はこれまで誰について語っていただろうか。「軍隊や王国の武器弾薬を委ねてならないのは国王」であり、暴君となるのも国王である。そして国王が資金を集め、国庫を閉鎖する、などなど。そして著者は、ここでは国王にのみ可能なことを語っているのである。

十八ページに対する反論を、私はきわめて明白に示すことができる。すなわちプロテスタントの軍隊の支配下での奴隷についても、教皇やフランス軍の支配下の奴隷とは極めて異なるのだ。イングランドは最初の例を経験し、他の国民が後者の例を経験したことを見てきた。隷属にも違いがあり、アルジェはサリー[34]よりもましである。さらに悲惨さにも程度の差がある。そしてこれは専制にあだ名を付けることではない。ラングドック[35]のプロテスタントに尋ねてみよ、フランスの竜騎兵がスペインの宗教裁判所よりひどくないかを。しかしこれは論点からはずれている。イングランドの賢明な方々にとっては、これらの奴隷制度は念頭にない。それゆえに、我々はあえて選択する必要もない。

私はここで著者の説に別れを告げ、事態の本質について少しばかり詳細に語りたい。そして彼が提起している他の主張が折々に出てくる物語の過程において、その答えと合致するかどうかを論じたい。

最初に述べたとおり、「これは我々にとり、どのような意味があるのか」。イングランド人である我々には、世界のいかなる国民に対してであれ、我が国の法律や、国政に関して不満を述べたりする納得できる理由が少しでもあるのか。なぜならば、私自身が、そしてイングランドの自由土地保有者のだれもが我々自身で、暗黙のうちに同意し、議会における代表者によって国政を行っているからである。それ故に、我々の自由、さらに我々の生命も彼らに託されている。頼まれもしないのに出しゃばって、国民全体に対してあれこれと指図するあなたはいったい何様なのでしょう。もしも「下院」が五万の軍隊を維持することが適切だと考えれば、彼らは疑いなく、自分たちでその軍隊を維持し、監督する方法を見い出すでしょう。したがって、そのような軍隊は我々の自由の破壊者ではなく、擁護者となるでしょう。だからその件については議会に委ねよう。

しかし、国王がいわれもなく恐ろしいものであり、「国王の軍隊は我々を破滅させるが、

議会の軍隊は我々を擁護する」とか、十一ページにおいて「共和国は軍隊を持ってもよいが、君主国は軍隊を持ってはいけない」、と著者は述べている。さて、もし召し使いに武器を持たせることがそれほど致命的ならば、市民軍を総動員することも、召し使いに武器を委ねてしまった西インドのフランス人がそうであったのと同様に危険である。常設の市民軍がヴォー人[36]とかミケレット[37]のように訓練され、統制されれば、それは「常備軍であり、もし彼らに機会を与えれば、彼らと同様に横柄になる。そして常備軍は」、訓練されれば、「専制的になることから免れて安全になる」といえよう。

この著者の許しを得て、私はイングランドで二万人の軍隊を維持する方法を提案させていただきたい。その軍隊は破壊的なものからはほど遠く、王権による権利の侵害があった場合には、あらゆる機会に国民の自由を維持し、その擁護者となる。それこそが世間の要求である。ここでその種の私の計画を持ち出すよりも、むしろ質問させていただきたい。なぜなら、政府の重大な関心事に関して、私が述べるよりも疑いなく十分立派に認識されているに違いない先輩たちにあれこれ指図することは私には似つかわしくないと思うからである。

ここでの問題はより適切に言えば、我々が語っている軍隊はどのような種類のものなのかということである。それは国民から独立した、国王によって給与を支払われ、完全に国王の言いなりの軍隊なのか。仮にもしそれが五万人もの軍隊であれば、当然一言あって然るべきである。しかしこの著者は二万人以上の軍隊については述べておられないし、彼はなんの根拠もなしに述べておられるようだ。それでいて同時に市民軍の勇気と実績について語っておられ、六万人の市民軍を設置し、整備すべきだと言われる。この市民軍についての議論は奇妙に趣旨が曲げられている。あるときは、彼らは我々を防御してくれる偉大な英雄であり、そうでないはずはあり得ない、などなどと二十ページと二十一ページに続いて説明している。またあるときは二万人の軍隊でも、いや、ずっと少数でも、ともかく軍隊であれば「我が国民全員を破滅させてしまう」ほど、この市民軍は弱小だとする。もし市民軍が世界中から我が国民を守るのに十分強大だとすれば、少数の常備軍では我々に危害は与えられないであろう。もしそうでないとするならば、我々は軍隊を持たねばならないし、そうしなければあらゆる侵略者に対して無防備で危険に身をさらすことになる。

それゆえにこの著者は、いかなる国の市民軍が単独で、訓練された軍隊の援助もなく、何らかの軍務を果たしたかを示そうとはなさらない。私は市民軍がうまく軍務を果たせなかった数多くの例を彼に提示できる。イングランドの市民軍が何らかの軍務を果たせたと言えるのは清教徒革命のときである。そして議会軍の騎兵士官で現在も生存しておられる

人の名前を挙げることができる。彼は国王軍の騎兵と進路を争うために将軍により細い道に配置された。国王軍の騎兵はチェシャーのワリントン橋[38]から進軍してきたので、敵が迫ってきているのに気づき、将軍に歩兵の救援を求めた。彼は市民軍の歩兵を一隊と竜騎兵の一分隊を派遣した。歩兵はほとんど身を隠して射撃できる通路にそった生け垣を防壁としてその後ろに陣取った。しかし国王軍の騎兵が現れるとすぐに一発の銃弾も発射せずに彼らは全員逃走した。これらは訓練された市民軍であった。しかし我々の著者はいつくかの国の市民軍が国民を守ったとして三つの例をあげている。そしてある国の市民軍の勇敢さを示した、さらに三つの例を挙げている。これらの例について少しばかり吟味してみよう。

ポーランド、スイス、そしてグリゾン[39]は常備軍もなく強大な隣国から自国を防衛した国々である。ポーランドに関しては、どの程度まで自衛したかをのちに示したい。スイスとグリゾンに関しては強大な敵に囲まれて国家を維持しているが、それはサヴォイ公がフランスとスペインの間で自衛しているのと同様であり、ハンブルグがデーン人とゲル大公国の間で存続しているようなものでもあり、ジュネーブがフランスとサヴォイの間で存続しているようなものだ。隣国が彼らを餌食にしてしまえないと言うのではなく、一方が彼らを攻撃すれば、他方が彼らを援護するからである。というのは彼らを一方が所有することは他方にとっては不利益になるからである。

しかし、今は市民軍について語らねばならない。先の戦いにおけるロンドンの補助部隊や、この戦争におけるヴォー人とかミケレット人について見てみよう。ロンドンの補助部隊については、見習い兵と呼ばれていたが、彼らは善戦した。それは訓練された軍隊と協力しての話である。付け加えて言うならば国王の当時の軍隊は未熟であり、補助部隊と大差がなかった。

ヴォー人は孤児であり、臆病者を戦わせるほどに悲惨で絶望的になっている人々であり、家族を殺害され、財産を失って、耐え難いほど怒り狂った、少数の零落した人々であった。そして、彼らはドラゴンや復讐の女神たちになったと見なされる人々であった。そんなヴォー人でさえも小部隊や小競り合い、奇襲、駐屯地の襲撃など以外は決して戦わず、近寄れない岩場の隠れ家で守られ、断崖の後ろに潜み、そこから稲妻のように敵に襲いかかり、どこにいるかもはっきりとわからないうち逃げ去ってしまう戦法であった。

カタロニアのミケレットはもう一つの例である。これらは山岳地帯の優位な地形を利用して護送隊を待ち伏せしたり、小部隊を奇襲したりしたが、その国における自軍の弾薬庫から遠く離れていたフランス軍に多大な損害を与えた。このように話を進めるのは、これほどまで巧妙な論争者と議論するには事物をきわめて正確に述べることが必要だからであ

る。しかしヴォー人にとってもスペインゲリラ兵にとっても野戦における戦闘は別に並外れて優れたものではない。アイルランドの市民軍に関しては彼らの名声はすべて軽蔑されるべき、惨めなアイルランド人の行状のせいにすぎない。アイルランド人のような烏合の衆の軍隊以外、どのような軍隊を相手にイニスキリング[40]やロンドン・デリー[41]があのように立ち向かい耐えられたであろうか。したがって市民軍のこれらの偉業はすべて幻であり、現在の状況には全くあてはまらない。

ここで少しばかり返答の形で主張しておきたいが、現在、イングランド国民にとって通常以上に防衛体制を整えることが必要と思われる。もし私がこれを証明できなければ、何も言うつもりはない。第一に、この必要性は近隣諸国の姿勢から由来する。このパンフレットの著者によれば、「以前は市民、兵士、それに農民には相違がなかった」という。しかし現在は事情が異なる。戦争は科学となり、軍隊は専門職となった。そして我々の近隣諸国は経験を積んだ兵士の軍隊である常備軍を維持している。それで我が国が常備軍を持たなければ世にも奇妙な非武装状態で危険にさらされることになる。

昔は戦いの方法はみな共通であった。もし兵士が戦場から軍営に逃げ帰れば相手も帰陣した。これは敵味方双方にとってお互いに好都合なことであった。しかしローマ人はどのようにして自分たちの国境地帯を守備し、植民地を経営したのであろうか。それはローマ市民によってなされたわけではなく、軍団兵によってなされたのである。そして近隣諸国が訓練された兵士からなる常備軍を保持しているときに我が国は非武装のままでいるべきであろうか。突然の紛争に対して誰が我が国の安全を保証するのであろうか。ウェストファリア条約[42]とナイメーゲン条約[43]を調べて、フランス国王の行動を吟味してみれば誰でも、目に見えて優位な状況において、このような条約が自分の身を縛るほど神聖なものだなどとは思っていなかったことがわかるであろう。またなぜ彼をそのような誘惑に導く必要があろうか。彼とロレン公、サヴォイ公、そしてスペインとのいくつかの条約を考えてみさえすればよい。それらの条約が締結された後、ロレン全土の捕獲とか、サヴォイ全土の占領、さらにルクセンブルグ全土の占領と続く。ナイメーゲン平和条約に真っ向から違反してのオレンジ公国に対する奇襲攻撃、などなど。そしてこのような隣国がありながら我が国は軍隊も持たず、非武装のままでいるべきであろうか。もし我が国が完全に無防備であると気づいたフランスが我が国を侵略しないと誰が保証できようか。

この差し迫った事態に答えてこの賢明な著者は言う。「我が国は対抗すべき手段を保持すべきである。我が国は陸上兵力を持たなくても、海軍力を持つべきであろう。すなわち立派な艦隊である」。誠にご立派な説である。しかしこれはジョンソン氏のもう一つの偽

りの紋章ではなかろうか。烏合の衆のように、マスケット銃隊の奴隷となることと同じではないだろうか。我が国の現状は、この著者によれば陸軍よりは海軍による専制政治の危険にさらされているという。いや、私が立派な艦隊の提督であれば、四万人の軍隊の将軍であるよりもこの国の専制君主として君臨しようと企てるであろう。記憶によれば、四年前、ジャコバイト派の大いなる叫びであったが、同盟国のための戦争に（いまいましい同盟国だが）莫大な負担を強いられた。我々に立派な艦隊を保持させてもらえれば、世界中を相手に我が国を防衛して見せよう。誰が没落し、誰が覇権を握ろうとも、だれにも我が国に干渉させはしない。神に感謝すべきであるが、国王は何がイングランドの利益になるか、よりよくご存じである。フランダースでの戦争は、誰が侵入者であろうと、イングランドでの戦争と同じである。ある王国と強大な敵国との間の防壁は極めて重要なものであり、オランダは常にスペインを援助するための戦争の負担に十分値打ちがあると見なしてきたのである。そうすることにより彼らは自国の国境地帯から戦争を遠ざけることができたのであり、我が国も同様にすべきである。

この艦隊という愚かな対抗手段を擁護するためにこの著者はあえて次のように語っている。「もし我が国の艦隊が十分に武装されていれば、我が国を侵略しようなどと考える君主は愚かである」。しかし我々は事態が異なることに気づいた。まさにこの戦争においてジェイムズ二世はアイルランドに侵攻し[44]、フランスが八千人[45]の援軍を送り、彼らはボインの戦いで奮戦したので、もしジェイムズ二世が自分の役割を同様にしっかりと果たしていたら[46]彼らにとってより価値のある勝利となったであろう。この後、彼は再びその八千人を送り、サン・リュート氏[47]を派遣し、さらにリムリック[48]へ救援を送ったが、手遅れであった。これらすべての出来事はイングランドが国家となって以来、かつてないほどの偉大な艦隊を持っていたにもかかわらず起きた事実である。

以上のような経験から、この馬鹿げた対抗戦力としての艦隊説は挫折する。というのは軍隊を運ぶことはそれほど困難ではないからである。オレンジ公が船で運んできた一万四千人には六百艘の船が絶対的に必要というわけではなかった。しかしいつも必要というわけではないが莫大な物資があり、砲もあり、武器も、そして重い装備もあった。というのは、ポワンティ氏は遠征では十六艘の船でカルタヘナへ四千五百人を運んだのである。そして、先に述べた八千人は三十五艘から三十八艘の船でアイルランドへ運ばれたのである。

別の惨めな例は、この著者が我々にあてがおうとしている市民軍である。彼はこれらを誇大に評価し、世界中の敵から我が国を守るのに十分な戦力だという。それでいて同時に

少数の軍隊との比較で価値のないものとするほど過小評価しているのである。彼は確かに、もし「国王に少数でも衛兵を持たせれば、これらの市民軍では我々は滅亡し、我々の自由は破壊される」と認めている。これは誰にも理解できない、ひどい論理である。

もし市民軍がよく訓練され鍛錬されたなら、彼らは軍隊と同様に我々を奴隷化できるだろう。もしそうでなければ、彼らは我々を守ることもできない。もし彼らが我々を守れないなら、彼らは無意味である。そして、もし我々を守ることが可能ならば、危険となる。しかし、この著者は、「市民軍には危険はない。なぜなら市民軍は我々自身であり、その士官は地主である地方紳士である」という。だとすると、我が国の軍隊はイングランドの土地や財産持ちの紳士が多いのではないか。そして我々は彼らがイングランドの田舎の紳士や、自作農や、市民と同様に先の治世において、密談を持ちかけられたとき、専制政治の魅力に動じず、イングランドのプロテスタントの利益と自由にそむかなかったのに気づかなかったのか。彼らは将校任命辞令を放棄し、不法な命令に不服従の態度を示さなかったであろうか。臆病な市民が実に不愉快なおべっかや、度の過ぎる熱弁を奮って、国王に呼びかけていたとき、自分たちの束縛された苦境を感謝し、国王が求める前に自分たちの特権をみずから放棄した。これらの人々は我々の自由を守らなければならない人物であり、我々の自由は立派に守られるであろう。神のご加護を。この事例に直接に当てはまるスペインの侵略の題目に関するウォルター・ローレイ卿[49]の肉筆の演説原稿を示さなければならない。このパンフレットの著者は、少数の軍隊を運ぶのに莫大な海軍が必要だという例をあげるためにスペインの無敵艦隊は一万八千人の兵士のみを乗せて出撃したという。しかし彼はスペインの無敵艦隊がフランダースでさらにパルマ公[50]とその指揮下の二万八千人のオランダ兵を乗船させる計画であったことを忘れている。ウォルター・ローレイ卿がその紳士に述べたように、その軍隊があればこの王国を征服しようと考えることはあり得なくはない。そしてエリザベス女王がそのような事態に非常な危機感を抱かれ、女王はしばしばウォルター卿に次のように話されたそうである。すなわち、海上で無敵艦隊を撃滅していなければ自分たちは破滅していたであろう。というのは我が国の軍隊は駆り集めの兵士や、市民軍などだからである。

話を続けると、このパンフレットの著者が主張するフランス王が戦争を再開しそうもないという説についてすべて認めたとしよう。それは彼にとって極めて致命的なことであった。そしてジェイムズ二世の帰還に関しては、つねに市民軍が彼に対処するのには最適であるとしよう。しかし、彼自身の最悪の状態を考える方法を使えば、フランス王が同盟に単なる儀礼的な態度を示しながらも、宣戦布告をし、少しばかり息を吹き返したとき、可

能な限り突然に、単独で、我が国に五万人の軍隊を殺到させるであろう。我が国の艦隊が、ジェイムズ二世がそうであったように、たまたま閉じこめられていたら、彼らがその機会を捉えて上陸すれば、彼らの軍隊に対抗するために、まさに我が国は市民軍を招集しなければならなくなる。市民軍は奮戦するだろう。しかし、フランスおよびスイスの歩兵六十個大隊に対して何ができようか。この紳士はもし市民軍が敵に対して一発も発砲することなく、全員逃走したとすれば自ら縛り首になるというのであろうか。私は絶対そのような目には遭いたくない。

しかし、他方、もしも市民軍が外国軍隊に対して十分な防衛力となるとするならば、国内勢力に対しても同様である。とくにこの国内戦力は外敵に侵略されない程度に十分な戦力にとどめられるような適切な均衡を保たれるのであるから。例えば、国王が衛兵と駐屯兵を含み、二万人の軍隊を常時維持し、訓練され鍛錬されたイングランドの市民軍がこれに加われば、市民軍単独では何もできなくても、かなりな戦力になる。私は数多くの市民軍の活躍の例を彼に示すことができる。しかし正規軍と合同で行動した時以外の彼らの真の勇敢さについて聞いたり、読んだりしたことはない。

悪名高い例をはっきりと挙げるなら、コンデ公がシャレントン[51]でパリ市民を攻撃したとき、その大都市は大騒動となり、コンド公を追い返すために二万人を派遣した。コンデ公は千五百の騎兵と竜騎兵で彼ら全軍を追い返し、彼らは城門内に逃げ帰るまで後ろを振り向くことはなかった。

一定数の軍隊を維持することの別の必要性として、新規に編成した軍隊を軍役に耐えるように訓練するには多大な費用と困難が伴うことである。あえて言うならば、戦闘の性質が変貌し、戦争の技術が進歩したので、国王が新しい軍隊を編成し、戦闘経験のない新米の士官に指揮させるとなると、三年はかかることになり、敵に対抗できる能力を備えるには三万人が必要となるであろう。戦闘は昔とは異なる。この著者は本で読んだだけの兵士であると思う。なぜなら彼は、読書により工兵になれる、と言っている。しかし、本で学んだだけの砲手が町を砲撃できたなどと言う話は聞いたことがない。そのような思考方法は量りや図形には応用できるかもしれないが、実験は実践により成果を生み出すのである。兵士の精神を高め、（城の堀の）外岸の斜面に向かって猛攻撃をかけることを覚えさせるのは、マスケット銃を扱い、命令の用語を覚えることではない。兵士は勇壮さの段階に至る前に慣れによって戦争の恐怖をよく知っておかなければならない。イングランド兵に内在的価値があるというわけではない。しかしイングランド兵がフランダースで戦い、我々の自由を守るために敵と対峙して一命をなげうっているときに、この著者が兵士に対

して投げかける口汚い言葉によって彼の主張が補強されることはない。見下げ果てたこのパンフレットの著者によって浮浪児とか鶏泥棒などという悪意に満ちた言葉で扱われることは耐え難く、過酷である。私は兵士ではないし、兵士であったこともないが、我々が現在の自由を享受し、国王が王冠を戴き、国家が平和を享受しているのは、このパンフレットの著者が言うところの、「浮浪児」の血であがなわれていることは認識しているし、彼らに対して少なくとも礼儀はわきまえたい。

（このパンフレットの著者が呼ぶように）すべての英雄たちを失った場合、イングランドがいかに奇妙な国家になるか少しばかり吟味してみたい。実際、もし私が千人の部下を持つ海賊であれば、海岸地帯を常に恐怖に陥れるために手をつくすだろう。我が国は世界でいかなる名声も帯びているように振る舞ってはならない。いかなる国も我々の友好を評価しないであろうし、我が国に対する攻撃を躊躇しないであろう。我が国の外国での交易は安全でもなくなるだろうし、国内の交易も同様である。我が国の平和は、現在しっかりとした土台の上に確立されているが、それは何によって獲得されたものであろうか。戦争により獲得されたものである。さらに、第二の原因について述べるならば、我が軍の勇気である。そして何がそれを守るのであろうか。真実同じく我が軍の名声以外にあり得ない。そしてもしその名声が地に落ちれば、我が国の平和はどれくらい続くであろうか。原因を取り去るならば、その結果である平和は、確実にそれに続き、消え去るであろう。

ここでこの著者が我々に提唱している事と同様な危険を冒した国家の歴史を少しばかり吟味してみよう。そして、補助部隊を解散させるまで、ローマ人によって征服されることのなかったカルタゴの遠い昔の話にさかのぼるまでもなく、常に皇帝に軍隊の援助を認めなかったコンスタンチンノープルの市民は当然の結果としてまもなくトルコによって破滅させられている。話を我が国の近くに戻そう。フェルディナンド二世[52]はドイツのプロテスタント地域全域を蹂躙し、その政体自体をまさに解体しようとしていたが、それはすべて自国を守る十分な軍事力がなかったためである。そしてもし彼らが偉大なグスタフ・アドルフス[53]によって救済されなかったならば、彼らを救うためには全能の神が奇跡を起こさなければならなかったであろう。次にポーランドをみてみよう。このパンフレットの著者が常備軍を持たずに自国を守り抜いた自由諸国の一つであると見なしている国である。この件について彼はほとんど知識がないと思うのであるが、第一に理解すべき事は、ポーランドは自国を守り抜いたのではない。または仮にそうであったとしても、軍隊も持たずに我が国ができる程度の、極めて嘆かわしい状況であった。もしくは、ピクト人やスコット族が我が国の敵対する隣国であったときのような昔に我が国に可能であったような程度

のものであった。常備軍も持たずに自由を享受しているポーランドがいかにして自国を守ったか検討してみよう。第一に、柔弱なモスクワ人にリトアニア側を略奪され、ポーランド軍は常に野戦では敵を打ち負かしたが、それでもモスクワ人はポーランドの市民軍が集結する前に、最初に彼らの国を掠奪した。他方、タタール人は数度の素早い攻撃で北部ポーランド、ウクライナ、ヴォルヒニア、さらにはクラクフ[54]の城門までも蹂躙した。そして五十年間のうちに彼らはこれら惨めな自由人百万人を奴隷として連れ去ったと言われている。その結果、アジア全域がポーランド人の奴隷で満ちている。

東部においてはスウェーデン王、カルロス・グスタフス[55]が王国全域を蹂躙し、ワルシャワ、クラクフを占領し、国王カシミールを打倒し、シレジアへ敗走させたが、それはただ一度の会戦であり、そして実際、前線で対抗する軍隊が準備できなかったからである。というのはカシミールが復活し、軍隊を再結集するとただちにカシミールは対抗し、スウェーデン王と遭遇したときはどこでも不屈の決心で戦った。しかしこの国の荒廃は長い間回復できなかった。

我が国により近く、当面の問題により近い話をすれば、隣国オランダは、現在の国王の少数派であるデ・ウィット派の人々が、バーナベルトの方針をかかげ自国の自由を守り、蘇ったが、自分たちの自由を守るために、オレンジ家の権力を押さえたいと主張した。しかし以前自分たちの自由を確立した軍隊の力を恐れて解散させ、自分たちの安全を確保するために、訓練された市民軍に頼った。この市民軍こそがこの著者が語っているものである。いや、この市民軍は軍隊の顔を持ち、給料を支払われて維持されている。しかし士官職は有力市民の子息に与えられており、町は自分たち住民の中から統治者を選んでいる。

これがまさしくこのパンフレットの著者が提唱していることである。この事態の結末はどうなったであろうか。これらの勇敢な部隊は前線の町の要塞に配置された。そして一六七二年、現在のこの利己的なフランス国王が神聖なるウェストファリア条約が締結されているにも関わらず、二つの恐ろしい軍団の先頭に立ち、この国に侵攻したのである。そしてこれらの市民軍は、国民の自由の防波堤であったのだが、一撃も加えずに、フランス軍が占領してしまう前に、二千人とか、三千人とか、いや六千人もの兵士が駐屯していた極めて難攻不落の町を明け渡したのである。その結果、およそ四十日の間にフランス国王は四十二の強大な町を占領したのである。彼を邪魔する軍隊は戦場にはいなかったけれど、現在であれば七年はかかるであろう。そのとき国民は自分たちの過ちに気づき、この破滅を招く提言をした著書を破り捨てることで贖うしか他に方法がなかったのである。

そして真実、これらの例は非常に生々しく思え、このパンフレットの著者が、これらの

出来事を知らないほど無知であるとは思えないので、返答を用意していないはずはないだろう。彼は自分のパンフレットに対するあらゆる反論において、これを予想できるはずである。これらの出来事は隣国が軍備を整えている場合に、これらに対抗できるものは艦隊だけでしかないとするならば、非武装国家の結末がどのようなものになるか少しばかり我々に教えてくれる。すなわち以下のような返答になるであろう。我が国に艦隊があったとしても、すべての海域において制海権を常に確保できるか、もしくはエリザベス女王が実行されたように隣国に艦船を建造させないようにできなければ、侵攻されうるであろう。しかし現フランス王はこれらのどの部類にも含まれないし、その海軍力は侮れないものである。また、その海軍力は弱小などというものではなく、容易に侵攻を援護できるであろうし、このような状況に身を置くことは安全ではない。

軍隊を必要とする別の事柄は我々自身にあると思われる。国王と国民が同じ気持ちであっても軍隊の助けが必要なときがある。ジェイムズ二世とその議会は十分に理解し合っていた。そして議会は国王に対してそれまで以上に強大なものであった。それでもモンマス公に対抗する正規兵がなかったなら両者はどうなっていただろうか。そのとき新規に軍隊を編成しなければならなかったとすれば、今ジェイムズ二世がそうしているように、フランスへ立ち去っていただろう。もしくはイングランドにとどまっていたとしても、事態はより悪化しただろう。というのは私の知る限り、彼らは現在の国王のように慎重には遇してくれなかっただろうから。

ジャコバイト派に関しては、対抗手段としてなんらかの軍事力を保持するために議論する値打ちがあるものなどとは見なしたくはない。ただ国王自身に対する暗殺や個人的殺人を防ぐためにだけに述べておこう。なぜなら彼らはフランスによって強力な援助を受けた時以外は現国王と直接対決しようとしたことはなかったからである。あえて言うならば、彼らには決して自ら剣を持って我が国の治安を乱す勇気はない。彼らにできることは、もし可能なら、不信を煽るために策動し、国王と国民を反目させるために不満を募らせるか、もしくは国王を破滅させるために密かな悪意に満ちた暗殺を行うか、またその手段により、国全体を流血と無秩序の状態に陥れることである。

エリザベス女王のアランソン公に対する演説は非常に偉大で勇気のあるものだったと思う。しかし、そのときエリザベス女王は常備軍を保持しておられなかったであろうか。反対に、女王陛下は決して常備軍を解散させられることはなかった。女王陛下はオランダへ援軍として、フランスへはナヴァール王の援軍として、さらにアイルランドにも自身の戦争遂行のために派遣された軍隊は三万人を下ることはなかった。相違があると言えば、女

王陛下は軍隊を外地に駐留させ、隣国の援助のために使用され、また完全に軍隊を掌握されていたことである。そしてスペイン無敵艦隊の接近に際して、自国に軍隊がいない事態を非常によく理解されていたので、それ以後は自国を無防備な状況におくことは決してなかった。それゆえに当時の敵軍と現在の敵軍を比較し、また女王陛下の軍隊と、現在の軍隊のいない我が国を比較するならば、この著者が十九ページで提案していることは我々の理解力にたいする欺瞞であり、彼以外誰も歴史書を読んだことがないと厚かましくも思いこんでいるようなものである。

さらに二十六ページで国王チャールズ二世の話になると、彼は次のように語る。「現在よりもずっと少ない軍隊で我が国は困難な事態に対抗して戦った」。この発言には次のように答えよう。軍隊としては、それらは苦痛の種とは考えられていなかった。そうではなく、ローマ教皇の同盟の状況に付帯するものであり、ローマ教皇の跡継ぎが視野に入っている問題であり、そのように思わせるように処理したので、事態はそう考えられたかもしれない。さらに大審院はそれを提案し、彼らがチャールズ二世に既存の人数の軍隊を認めた議会に提案したかのように、同様に不当ではないと決定した。

この著者はもう一つ、大胆な断言を二十七ページで行っている。すなわち常備軍はジェイムズ二世を導き入れる唯一の方法であるという。これは奇妙な本末転倒の仮説であり、どのような議論をしてもそれを証明することはできない。しかしいつの時代でも、激しい革命をもたらした兵士の不安定で気まぐれな気分はその説を受け入れるかもしれない。手短に言うならば、それは可能性があると彼は言っているにすぎない。そして国王ウィリアム自身が心変わりして、王権を放棄し、ジェイムズ二世を再び呼び戻すような事態と同じ程度にその可能性は極めて少ない。それゆえにどうか我々に国王を戴かせないでください。というのは真実すべてがなされた後はこれらの国王は奇妙なもので、非武装の政府において今まで経験したことのないような、世界でも極めて過激な革命をもたらしてきたのである。さらに、国王がいなければ常備軍も十分安全であろう。彼の言葉によれば、「共和国において常備軍は認められるが（十一ページ）、君主国では常備軍は悪魔そのものとなる」。いや、彼は我が国において軍隊が主人を追放した時代のオリヴァー・クロムウェルとマンク将軍の二例を挙げている。しかしこれら両者とも共和国時代の人物である。仮にも軍隊が国王を追放したことがあるとしても、ジェイムズ二世に関する例は誤りである。ジェイムズ二世は実際には軍隊から自ら逃亡したのであり、軍隊が彼を追放したわけではない。軍隊の一部が敵前逃亡したことは事実としても、あえて言えば、ジェイムズ二世が残存部隊とともにうまく退却していれば、軍人らしく、ロンドンへでも、もしくは

ポーツマスへでも、さらには両所に退却していれば、フランス王が彼を救出するまで誰も彼を追撃してこなかったので、上手くやり遂げられたかもしれないし、現在も内戦が続いている事態となっていたかもしれない。

このようにして私は最後のページまでこの著者の跡をたどってきたが、彼の主張や例などで重要なものは何一つ省略しなかったつもりである。彼の主張に対する答えとなっているかどうかは読者の判断にお任せしよう。このパンフレットの著者の詭弁的な主張の濫用において気づいたことは、証明が欠けている点を機知によって粉飾するためには引用を多用することが必要と思われる。彼の悪意に満ちた精神が至るところで読み取れるので、彼は何事に対しても不満に満ちた人物であり、自由の仮面を借りて自分の悪意を政府に向けているように思われる。それは別に新規なものでもなく、自由とはローマ帝国政府を混乱させようと思った人間が誰でも常に用いた言葉であり、それは今も変わらない。

結論

彼のこの主張に対してはこれ以上語らないでおこう。ただ全般的に現在の論争に関して多くの方々の温かい言葉を望みたい。

私にとっては、国王陛下が我々の自由を保持し、平和を確立するため、国王自身、およびその家族に対する反感を克服し、血なまぐさい戦争の労苦を経験した後、帰国されたときに、ジェイムズ二世と同様に恐れられるべき人物として描かれ、論争の内容も、周囲の状況の把握も十分理解されないうちに、精神異常者のごとく扱われ、信頼できない人物として、一個人が国王陛下をこのように非難するなどということは、この時代に今までになかったほど極めて無遠慮であつかましい行為であるように思われる。

国王陛下は常備軍を要求されたであろうか。そのような提案をなされたであろうか。そのような主張をなされたであろうか。そのようなお考えが国王陛下にないとしたらどうであろうか。それは我々がどのような政府のもとで暮らしているか、また、最も寛大な善意に対して非難を浴びせるような人々の精神構造がどのようなものかを示す証拠である。以前、イングランド議会が軍隊を解散させようと難題に取り組み、国王陛下がそれを維持しようと堅く決心しているのを我々国民が目の当たりにしたときに、国王と軍隊に対してそのような激しい侮辱的言辞が弄されたこともあった。しかし、これは一体どういうことであろうか。国王と議会が連合して調和しているときこのような言辞を弄することはとても我慢できないことであり、国王陛下は自分に満足いくようにされるべきである。そして国王陛下がそのように行動されることを疑わない。

私は軍事政権に賛成する考えはないし、賛成者であるかのような意見を述べたこともない。しかし下院の賛同が得られれば、多大の人命と費用を犠牲にして獲得した平和を維持するために、十分な防衛力を維持しておくことの必要性に気づかれると思わずにはいられない。その方法は議会にお任せしよう。そしてこの著者もそうすべきであったと思う。あの偉大な議会において、国王陛下の名誉と安全に対して適切な敬意を払いつつ、すべての事柄は我々の自由を維持するためになされることに疑問はないし、またそれは可能でもある。議会に席を占めた議員たちが、国王と民衆の利益のため、きわめて着実かつ熱心に努力していることが示された。すなわち、国政について、議会が提案した事柄に対して国王陛下が少しでも嫌悪の念を示されたり、反論の兆候を見せられたりしたことなどは少しも目にしたことがない。陛下は自国の苦痛の種の処理は議会の判断にすべてお任せなのではないか。そしてその救済策の包括的な判事としての議会にすべてを進んで委ねられたのではないだろうか。陛下は今まで裁判から悪人をかくまい、不満から寵臣を庇い立てされたことがあるだろうか。また議会の特権を侵害されたことがあっただろうか。そして王位継承者に関しては、陛下が我が王国に来られたときに宣誓をしておられる。すなわち彼の意図は我が王国を侵略する、いかなる君主の手にも陥らないような基礎のもとに我が国の自由を確立するためである。そして陛下は今までその宣誓に違反されようとしたことはない。そしてこれはどのようにして実現できるであろうか。パンフレットで指示されている方法ではない。この件に関してまだ誤った手段を講じていない国王、貴族院、下院による。彼らに事態は委ねよう。そしてもし彼らが合意すれば、軍隊を保持しても、保持しなくても、どちらでもよい。訓練された市民軍でもよいし、訓練された軍隊でもよい。それは陛下にとって何の違いがあろうか。

私は実際、国王の安全と名誉のために、そして国民の自由のために、訓練されて軍隊となる市民軍の評判を大いに耳にしてきたし、確かに、軍隊は訓練された市民軍ともなりうる。しかし私が述べたように、それを決めるのは政府に委ねたい。そして、以下の言葉だけで結論としたい。このパンフレットの著者である紳士の身元が分かれば、次のような人物にちがいない。すなわち、自分が今よりましな処遇を政府より受けて当然であると考えており、政府が、よりましな処遇をすべきであったか、もしくはより冷たい処遇をすべきであったかを認識させるためにこのような手段をとったのである。

あとがき

メアリ二世との共同統治[56]を経た後、単独君主となったウィリアム三世治下の1697年、イングランドにおいて、国王に平時に常備軍の維持を認めるか否かに関して論争が巻き起こった。このような論争は以前からあったにせよ、このときほど熱心に論じられたことはなかったようである[57]。これは名誉革命と呼ばれる革命においてウィリアムが王権を受諾する際に議会により示された条件といえる「権利宣言」の一条項、「平時においては議会の承認なくして常備軍を維持してはならない」に起因するものである。名誉革命自体はイングランドにおいては文字通り流血の惨事をともなわない、いわゆる「無血革命」[58]と呼べるものであったが、スコットランド、およびアイルランドにおいては多くの兵士の血が流され続けており、いまだ両王国は国外亡命中のジェイムズ二世を国王として戴いていた。さらにまた、フランス王ルイ十四世はアイルランドにおけるジェームズ二世支持勢力に援軍を派遣していたばかりでなく、直接ジェイムズ二世を護衛してアイルランドへ送り届けている[59]。

このような状況下で、イングランド以外ではウィリアム三世の統治は盤石とはほど遠い状況であった。これはさらにアイルランドにおいて1685年から1688年までの三年あまりの短期間に終わったジェイムズ二世の治世において、アイルランド総督ティアコンネル伯爵などによるアイルランド軍内部のカトリック化が強く影響している。

このときすでに議会派による圧迫により、イングランドより脱出やむなき事態に追い込まれ、大陸に亡命していたジェイムズ二世はカトリック系アイルランド貴族の蜂起に呼応して上陸し、アイルランドからイングランドの王権回復を目指した。1690年７月１日のボインでの戦いの後、形勢不利と見てアイルランドから再びルイ十四世の助力により、フランスへ逃亡したが、ウィリアム三世は常にその勢力（いわゆるジャコバイト派）による脅威にさらされていた。

このような周囲の状況にありながらも、共和主義者による常備軍反対のキャンペーンの一環として出版されたパンフレットに対して、ウィリアム三世を支持するデフォーが黙っていることができないのは当然である。彼がこの対抗するパンフレットを書いたとき、政府閣僚から報酬を受けていたかどうかは明確ではないが、どちらにせよその内容はデフォー自身の本心からかけ離れたものとは言えないであろう。

内容にはこの種の書き物として当然のことながら、誇張された主張もあるが、デフォーの面目躍如と言える作品である。

デフォーはこのパンフレットに続けて常備軍の必要を説くパンフレットをさらに二編書

いている[60]。

今回訳出したものはその第一作となるものであり、同年10月に出版された John Trenchard と Walter Moyleの 共著と言われている以下のパンフレットに対する直接的な反論である。*An Argument, Shewing, that a Standing Army Is inconsistent with A Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London: 1697(October). 以下 *An Argument* という。

注

本稿はダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660?-1731）の以下のパンフレットの翻訳である。*Some Reflections On a Pamphlet lately Publish'd, Entituled, An Argument Shewing that A Standing Army Is inconsistent with A Free Government, And Absolutely Destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London: 1697（以下*Some Reflections* という）。本パンフレットの第二版のマイクロフィルムは近畿大学経済学部所蔵のGoldsmiths'-Kress Library of Economic Literatureにある。同学部教授中村進氏にご教示をいただいた。記して謝意を表したい。初版は1697年で、*Foreign Post*, 29 November－3 December 1697に「昨日発行された」と広告が記載されていることより、11月末頃であろう。第二版は、1698年1月1-4日号の *Flying Post* 紙に「本日出版された」と広告されている *An Argument Shewing, that a Standing Army, with Consent of Parliament, is not Inconsistent with a Free Government, &c.* の中で、「最近出版された」と記されているので、1697年末と思われる。また、表紙にも「1697年第二版」と記されている。初版においてはその著者として、D.T.と記されており、第二版ではD.F.と修正されている[61]。その他の初版と第二版との相違点については当該箇所で記す。

なお訳出に際して、*Political and Economic Writing of Daniel Defoe, Vol. 1, Constitutional Theory*, ed. by P.N. Furbank, London, Pickering & Chatto, 2000を参考にした。

1　本パンフレットは上記*An Argument*に対する反論として書かれたものである。*An Argument* には著者の名前は無く、献呈の辞の終わりにABCDEFGと記されているが、共和主義者 John Trenchard（1662-1723）とWalter Moyle（1672-1721）の共著であるとされている。

2　James II（1633-1701）《在位1685-88》名誉革命により1688年12月25日フランスへ亡命。ルイ十四世によりパリ近郊サンジェルマン宮殿を提供された。

3　Jacobite James のことをラテン語で Jacobin ということから、ジェイムズ二世とその直系の子孫を支持する党派のことをさす。

4　Jehu エフーともいう。アハブの全家を滅ぼしたイスラエルの王; 兵車での猛攻で有名。旧約聖書《列王記II》9 章の20参照。

5　1688年12月23日夜、ジェイムズ二世は誰も追跡、追求などしてもいないのに滞在先のロチェスターよりフランスへ亡命した。友清理士、『イギリス革命史（下）』、研究社、2004年、95ページ。

6　この初版では署名は D.T. となっているが、同年に出版された第二版ではD.F. に修正されている。

初版ではこの署名の下に以下の内容の正誤表が示されている。

十四ページ。「すでに示した」とあるのは「後に示すように」。九ページ31行目、「ドミシアン、チツス、およびティベリウスとあるのはガルバ、オトー、およびウェスパシアン」。九ページ18行目、「メモリアムはメモレム、と訂正」。これらは第二版ではすべて修正されている。今回の訳は初版のままにした。

7　このタイトルにより上記パンフレットに対する反論を宣言している。

8　Mr. Stephen's unmannerly Books, William Stephens (1647?-1718). おそらく1647年3月27日に生まれたと思われる。'A Letter to King William III, showing (1) the original foundation of the English Monarchy; (2) the means by which it was removed from that foundation; (3) the expedients by which it has been supported since that removal; (4) its present constitution; (5) the best means by which its grandeur may be for ever maintained' などを書いている。彼は激しいホィッグ派の著作家であり、説教師でもあった。*DNB*。

9　a Ferg— おそらくRobert Ferguson (c. 1637-1714) と思われる。政治的策略家。スチュアート王朝に対する反逆計画に指導的役割を果たしたが、名誉革命後はジャコバイト側について活動した。

10　Henry VIII (1491-1547)《在位1509-47》後出のエリザベス女王の父親。

11　Charles II (1630-85)《在位1660-85》チャールズ一世の子、ジェイムズ二世の兄。

12　William III (1650-1702) イングランド・スコットランド・アイルランド王 (1689-1702) 1694年までは妃メアリ二世との共同統治。メアリ二世はジェイムズ二世の娘。ウィリアムとメアリは従兄弟同士で夫婦。

13　Corinthians コリントス人とも言う。Corinth: コリント地峡に臨む古代ギリシアのドリス人の都市国家、海陸交通の要衝として繁栄。

14　Lacedemonians ラケダイモン人＝古代スパルタ人の別称。

15　Thebans Thebes: テーベ人またテーバイ、古代ギリシアのボイオティアの都市、アテネと敵対した。アレキサンダー大王によって滅ぼされた。

16　Samnites Samnium サムニウム：イタリア中・南部にあった古代の部族国家、ローマとの三次にわたる戦争で滅亡 (290BC)。

17　ここでデフォーは先のパンフレットの 'contentedly returning when the Work was over' となっている語句を微妙に変更して、'contentedly return'd to it again when the War was over'

としている。詳細については、『語学教育部ジャーナル』第２号、「17世紀イングランド常備軍（翻訳）」藤原浩一訳、2006年、156, 157、174頁参照。

18 Charles I (Charles Stuart 1600-49)《在位1625-49》ピューリタン革命で処刑された。チャールズ二世およびジェイムズ二世の父親。妃はルイ十三世の妹ヘンリエッタ・マライア(Henrietta Maria 1609-69)。旧教徒のまま王妃となったことがピューリタン革命前夜における王の不人気の一因となった。

19 議会と対立した1642年、チャールズ一世は北方に退避し、イングランド中部の都市ノッティンガムで蜂起、軍隊とともにロンドンを目指し、ピューリタン革命の端緒となったが、のち議会軍に占領された。伝承ではロビン・フッドの生地とされ、郊外にシャーウッドの森が残る。

20 Keynton Field 現在は Kineton Field と言う。チャールズ一世対議会軍が1642年10月23日、Edgehill において戦ったピューリタン革命の最初の本格的戦闘。両軍とも決定的勝利を納めずに終わった。ノッティングガムよりロンドンへ向けて南下する国王軍を阻止するために議会軍が派遣されたが、その目的が遂げられなかったという点では国王軍の勝利といわれている。

21 Philipsburgh Philippsburgのこと。ルイ十四世のフランスと神聖ローマ帝国との間の係争地であり、オランダ戦争（1672-78）や九年戦争（1688-97）において、1676年、および1688年、フランス軍が包囲攻撃した。

22 Oliver Cromwell（1599-1658）イングランドの軍人・政治家。ピューリタン革命の指導者。護国卿（1653-58）。

23 *Oportet Mendacem esse Memorem; Political and Economic Writing of Daniel Defoe*, Vol .によると、'a liar needs to have a good memory' と注釈がほどこされている。

24 General Monk, George Monck ともつづる。（1608年12月６日－1670年１月３日）。イングランドの将軍。内乱中、スコットランド軍司令官であったが、1660年、護国卿政治が終わると混乱の中、軍を率いてスコットランドより南下し、ロンドンに入る。亡命中のチャールズ二世と交渉し、仮議会を招集してスチュアート朝復活を実現させた。その功によりアルベマール公爵（1st Duke of Albemarle）となった。*Wikipedia*。

25 Pretorian Soldiers ローマ皇帝の護衛兵。もしくは The Praetorian Guard ラテン語では praetoriani。皇帝が自らの護衛兵として使用する以前は古代ローマの将軍の護衛兵であった。スキピオ家（the Scipio family）が275 BC頃始めたと言われている。コンスタンティヌス一世（Constantine I）が４世紀に廃止した。

26 Gaul 古代ローマ人が〈ガリ Galli の居住地〉に与えた名称で、元来は「ガリ人の土地」という意味。カエサルの『ガリア戦記』で有名。現在のフランスおよびその周辺部を含む地域をさす。

27 Domitian Titus Flavius Domitianus Augustus (51-96) ローマ皇帝 (81-91)。正誤表でガルバ（Galba）と修正。Servius Sulpicius Galba（紀元前３年12月24日－69年１月15日）68年６月８日より死亡までローマ皇帝。四帝時代の最初の皇帝。ローマ皇帝。高潔で有能な政治家、軍人とい

う評判が高く、諸帝の信任を得てゲルマニアやアフリカを統治した後、60年からヒスパニア総督となる。68年ガリアの総督ウィンデクスの要請を受けてネロに反逆、彼が倒されると皇帝に推挙されたが、軍隊への報酬を拒否して兵士の不満を買い、また後継者問題で彼と同盟していたオト（Otho）と対立し、近衛軍により殺された。*Wikipedia*。

28　Titus　Titus Flavius Vespasianus（39-81）ローマ皇帝（79-81）。正誤表でオト（Otho）と修正。Marcus Salvius Otho（32年４月25日－69年４月16日）69年1月15日から69年４月16日まで四皇帝時代の２番目のローマ皇帝。*Wikipedia*。

29　Tiberius Tiberius Claudius Nero Caesar Augustus（42BC-AD37）。第二代ローマ皇帝。正誤表でヴェスパシアヌス（Vespasian）と修正。Titus Flavius Vespasianus（9-79）ローマ皇帝（69年11月17日－79年６月23日）。騎士身分の出のウェスパシア・ポッラと結婚により騎士身分となった父フラウィウス・サビヌス（アシア属州の徴税請負人）の子としてサビニ地方のレアテで生まれた。ユリウス・クラウディウス朝断絶後の４皇帝内乱の時代（68年６月～69年12月）に終止符を打ち、自らの血統に基づくフラウィウス朝を創始した。あとを継いで皇帝に即位したティトゥスとドミティアヌスの父にあたる。

30　Janisaries イエニチェリ 14世紀後半に設立されたオスマントルコ時代の精鋭部隊。1826年まで存続し軍楽隊が有名。オスマン帝国における常備歩兵とその軍団。トルコ語で「新しい兵士」を意味する。軍団の創設に関して定説はないが、14世紀後半、とくにアドリアノープル（現、エディルネ）征服（1360年頃）直後のことと推定されている。1354年以後オスマン朝のバルカン領土が拡大すると、新たな戦力の補給とバルカン諸民族の同化政策とを兼ねてこの軍団が創設された。最初、戦争捕虜の1/5が戦利品として国庫に属したことから、これをトルコ人の家庭に預けてトルコ語とムスリムとしての生活習慣とを身につけさせた後、軍団員として登録した。1402年のアンカラの戦に敗北後、オスマン朝のバルカン征服が停滞し、捕虜の確保が困難になると、デウシルメ制が導入された。これによって徴用された者の大部分がイエニチェリとなった。この軍団は16世紀末までは、オスマン帝国軍の精鋭として規律正しく、王朝の発展に貢献した。17世紀以後は軍紀が乱れ無頼集団化して、しばしば暴動を起こした。18世紀末以後、帝国軍隊の西欧化改革が進むと、軍団はこれに反対し、反乱を起こしたが、マフムト二世は1826年に軍団を廃止した。平凡社『世界大百科事典』。

31　Selimusセリム一世（Selim I、1465年-1520年 9 月22日）はオスマン帝国の第 9 代スルタン（在位1512年－1520年）。1512年、父バヤジッド二世を退位させてスルタンに就いた。即位後、内紛を避けるために兄弟たちは次々と殺された。バヤジッド二世もその後すぐに歿している。死因は「失意からの病死」と言われているが、セリム一世がバヤジッド二世廃位と同時に多くの反抗的な親族を殺害していることから、「セリム一世に毒殺されたのではないか」という説もある。『ウィキペディア』

32　Amurathアムラス=ムラト（Murad）。これはバヤジッド二世（Bayezid II）の誤りであろう。

スルタン在位1481-1512。ちなみにムラト一世は（1359-1389）、その次の君主はスルタン・バヤジッド一世（在位: 1389年-1402年）。ムラト二世は（1421-1451）、その次の君主はスルタン・メフメト二世（在位1444-1446、1451-1481）あり、ムラト一世、二世はそれぞれ、バヤジッド、メフメトによって継承されている。

33 Spahis スパヒス Sipahis ともいう。オットーマン帝国騎兵。14世紀に封建制度に基づいて組織された。16世紀半ばまで彼らはオットーマン帝国軍隊の中核であった軽騎兵の伝統に従ったので、火器の採用が遅れ、火器の発達により騎兵の重要性が失われた。フランス軍では一定数のアルジェリア人およびセネガル人騎兵隊も Spahis と呼ばれた。この語は Sepahis とつづられることもある。（*The Free Dictionary*）

34 Sally またはSallee「サリー」。17世紀末はイスラム教徒の海賊の根拠地と言われていた。デフォーの代表作、『ロビンソン・クルーソー』（1719）にも主人公が当地の海賊に捕われる事件が描かれている。

35 Languedocフランス南西部の地方名。18世紀までの古い州名に由来する。

36 Vaudois（スイスの）ヴォー（Vaud）州生まれの人。ヴォー州はジュネーブ湖北部地域。州都はローザンヌ（Lausanne）。

37 Miquelets（半島戦争でフランス軍と戦った）スペインのゲリラ兵。

38 Warrington Bridge 中世においてイングランド北西部の都市ワリントンはマージー川の架橋地点として重要であった。清教徒革命において敵対するクロムウェルとダービー伯爵の両軍がこの町に宿営したことで有名。*Wikipedia*。

39 Grisons Graubünden のフランス語読み。スイス東部の最大の州。

40 Iniskilling＝Inniskilling, Enniskillen, アイルランド語で Inis Ceithleann という。北アイルランドにある地名 1689年にジャコバイト軍に包囲されたが、勝ち抜いた。

41 London Derry イニスキリングと同様に1688年末よりアイルランドにおけるジャコバイト軍に対するプロテスタント側の抵抗拠点であり、攻城戦を勝ち抜いた。

42 Peace of Westphalia,（ドイツ語ではWestfalen）、三十年戦争（1618-48）を終結させた条約。1645年からドイツのウェストファリア地方のミュンスターとオスナブリュックとに分かれて講和会議が開かれ、各国の利害が衝突して長引いたすえ、1648年10月24日に調印された。参加国は、ドイツの領邦国家も一国と数えて、総計66カ国で、それまでのヨーロッパ史上最大の国際会議であった。平凡社『世界大百科事典』。

43 The treaties of Nijmegen（1678-79）フランスとオランダの戦争（1672-78）を終結させた条約。フランス国王ルイ十四世との調印が当地で行われた。

44 ジェイムズ二世のアイルランド上陸（1689年３月12日）はボイン（Boyne）での敗戦（1690年７月１日）により、失敗に終わる。

45 七千人という説もある。友清理士、『イギリス革命史（下）』143ページ。

46　1688年、ジェイムズ二世は軍隊を置き去りにしてイングランドより逃亡した。当時すでにロンドン入りしていたウィリアム三世は軟禁状態のジェイムズ二世の逃亡を黙認したと言われている。ジェイムズ二世はまたアイルランドにおいてもボインでの敗戦で形勢不利とみるや、軍を伴わずにフランスへ逃げ帰った。

47　Monsieur St. Ruth「サン・リュート」アイルランド、オーグリムの戦い（1691年７月12日）で戦死。

48　Limerick アイルランド南西部、Munster 地方北部の県; またその県都。1691年の戦いにおいてアイルランド軍最後の牙城。10月３日守備軍の降伏により陥落。

49　Sir Walter Rawleigh Sir Walter Raleigh（1554?-1618）のこと。イングランドの廷臣・探検家・文筆家；エリザベス一世の寵臣。

50　Alessandro Farnese（1545-1592）パルマ公（1586-1592）、スペイン領オランダ総督（1578-1592）. *Wikipedia*。

51　Prince of Condé 1649年２月８日のフロンドの乱におけるパリのシャランタン（Charenton）での戦い。コンデ公がパリを包囲した。コンデ公ルイ二世（Louis II de Bourbon, prince de Condé, Duc d'Enghien、1621年11月８日-1686年11月11日）はフランスの軍人。アンギャン公。のちに「大コンデ」（le Grand Condé）と呼ばれる。

52　Ferdinand II: Ferdinand of Styria（1578-1637）1619年に神聖ローマ帝国皇帝となる。

53　Gustavus Gustavus Adolphus II（1594-1632）スウェーデン国王。1630年、プロテスタント陣営軍として30年戦争に介入し、活躍したが、1632年、リュッツェン（Lutzen）において死去。

54　Crackow（Kraków、独 Krakau）は、ポーランド南部にある都市で、マウォポルスカ県の県都。ポーランドでもっとも歴史ある都市の一つであり、17世紀初頭にワルシャワに遷都するまではクラクフがポーランド王国の首都であった。正式には Royal Capital City of Kraków という。『ウィキペディア』。

55　Carolus Gustavus: 1655年、自分の王位継承を認めなかったという理由で、スウェーデンのカルル十世がポーランド王カシミールを攻撃した。

56　ジェイムズ二世の娘、メアリ二世は1694年12月28日（新暦で1695年１月７日）天然痘で死去し、ウィリアム三世が単独君主となっていた。

57　John Childs, *The British army of William III, 1698-1702*, Manchester, Manchester University Press, 1987, p. 185. 1697年から1700年にかけての常備軍論争は「おそらく軍事組織に関する現代初期ヨーロッパにおける最も徹底的な論争であったろう」と言われている。本書並びに同著者による *The Army, James II and the Glorious Revolution*, Manchester, Manchester University Press, 1980は織田稔氏所蔵本より利用させていただいた。記して謝意を表したい。

58　The Bloodless Revolution「無血革命」。一般に名誉革命（Glorious Revolution）と呼ばれている。現実にはイングランドにおいても数十名の兵士の命は失われている。

59　ルイ十四世とジェイムズ二世とはルイ十三世の妹、ヘンリエッタ・マライア（1609-69）がジェイムズ二世の母親であることより従兄弟同士である。

60　それぞれ、*An Argument Shewing, that a Standing Army, with Consent of Parliament, is not Inconsistent with a Free Government, &c.*,（1698年 1 月）、及び*A Brief Reply to the History of Standing Armies in England*,（1698年12月）. これは同年11月25日に出版された John Trenchard の *A Short History of Standing Armies in England* に対する反論である。

61　*A Critical Bibliography of Daniel Defoe*, Furbank & Owens, London, Pickering & Chatto, 1998, pp. 11-12.

※表紙は初版のタイトルページ。